

## 母親はどこに — “群れの内” に関する一事例 —

京都大学 山口飛翔

### 1. はじめに

2019年交尾期の調査期間中、B<sub>1</sub>群で1頭のオトナ・メスが確認できないにもかかわらず、同年春生まれのアカンボウは確認されることが2回にわたって観察された。この事例は、メスが観察者の視野に入っているサルたちの空間、すなわち“群れの内”（清家・疋田，2019）では確認されなくても、いつでも群れに合流できる場所にいた可能性が高いことを示している。以下はその報告である。

### 2. 調査方法

筆者は2019年9月8日から11月9日まで、オスからメスへの攻撃とそれに伴うメスの凝集性の変化を調べることを目的にB<sub>1</sub>群を終日追尾した。そして調査期間中毎日、6歳以上のメス全てについて発情状態や怪我の有無を確認するため、少なくとも日に2回、その時どきで群れのメンバーが広がっていると判断された地域を隈なく回って探索した。

### 3. 調査結果

調査期間中に、本稿の対象個体「アカネ」（当時13歳）を確認できたか否かについて表1に示した。「アカネ」は前年の交尾期にも群れの内にいない日が多い個体だったが（確認日数は36日/48日）、本調査期間中にはさらに確認できる日数が少なく（確認日数は28日/50日）、特に10月23日から11月9日までの19日間は一度も確認できなかった。また、表1には「アカネ」の妹（「アコ」、当時10歳）と娘（「アンズ」、当時5歳）、アカンボウ（「アズキ」）の確認状況もあわせ示した。妹は発情して群れ外オスとコンソートしていたために観察できなかったと考えられる期間（10月28日～11月9日）があったが、娘は群れが二つに分かれて行動（分派）していた10月13日を除いて全ての日で確認された。また、アカンボウは以下で示す事例以外は、母親がいるときに限り確認されている。なお、分かりやすいように上記4頭の血縁関係を図1に示した。

表1. 「アカネ」、「アズキ」、「アンズ」、「アコ」の確認状況

調査日	アカネ (母親)	アズキ (アカンボウ)	アンズ (娘)	アコ (妹)	調査日	アカネ (母親)	アズキ (アカンボウ)	アンズ (娘)	アコ (妹)
9/8	○	○	○	○	10/9	○	○	○	○
9/10	○	○	○	○	10/10	○	○	○	○
9/11	○	○	○	○	10/13	×	×	×	×
9/12	○	○	○	○	10/14	○	○	○	○
9/13	○	○	○	○	10/15	○	○	○	○
9/14	○	○	○	○	10/16	×	×	○	○
9/15	○	○	○	○	10/17	○	○	○	○
9/16	○	○	○	○	10/18	○	○	○	○
9/17	○	○	○	○	10/23	×	×	○	○
9/18	○	○	○	○	10/24	×	×	○	○
9/19	○	○	○	○	10/25	×	×	○	○
9/20	○	○	○	○	10/26	×	×	○	○
9/21	○	○	○	○	10/27	×	×	○	○
9/22	○	○	○	○	10/28	×	×	○	×
9/23	○	○	○	○	10/29	×	×	○	×
9/24	○	○	○	○	10/30	×	×	○	×
9/26	○	○	○	○	10/31	×	×	○	×
9/27	○	○	○	○	11/1	×	×	○	×
9/28	○	○	○	○	11/2	×	×	○	×
10/1	○	○	○	○	11/3	×	×	○	○
10/2	○	○	○	○	11/4	×	×	○	×
10/3	○	○	○	○	11/5	×	×	○	×
10/4	○	○	○	○	11/6	×	×	○	○
10/5	○	○	○	○	11/7	×	○	○	○
10/6	×	×	○	○	11/8	×	×	○	×
10/7	○	○	○	○	11/9	×	×	○	×
10/8	×	○	○	○					

註1. 10月13日は群れが分派中で、いずれの個体も含まない分派集団を終日追尾していたことによる。

註2. 調査を行わなかった日は表中に記載していない。

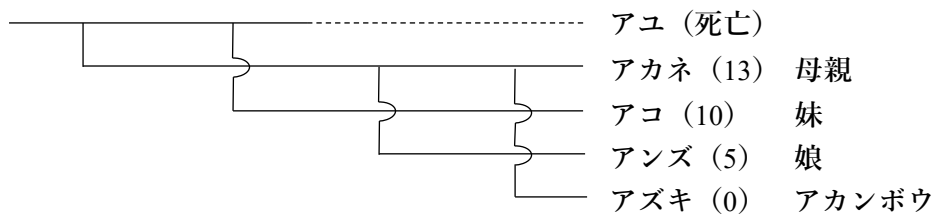


図1. 4頭の血縁関係

この図は4頭の血縁関係が一目で分かるよう、風張(2015)のB<sub>1</sub>群の家系図をもとに作成した。括弧内は調査時の年齢で、その右に書かれているのは各個体の本文中での呼称。

a) 事例1. 10月8日から10月10日の観察

10月8日、前日確認された母親はこの日一日中確認されなかったが、娘が休息中にアカンボウを抱きかかえたり、移動中に腹につかまらせたり背中に乗らせたりしている様子（以下、世話行動と呼ぶ）が一日を通して観察された。

翌10月9日の5時41分、群れを見つけた際にはまだ娘がアカンボウを抱いているのを確認した。母親も6時51分に一度確認したが、11時45分からと14時10分からの2回、メスの存在を確認して回った際には一度も確認されなかった（その際、6歳以上の他のメスは全て確認）。母親が確認されなかった時間帯には、娘のアカンボウへの世話行動が一日中観察された。

10月10日の早朝5時59分に群れを発見した際にも、娘がアカンボウを抱いているところを確認したが、母親は午前中に一度も確認されなかった（他の6歳以上のメスは全て確認）。その後12時7分、その日初めて母親が確認されたが、13時20分と15時30分ごろの2回、メスを探索した際には母親は確認されなかった（他のメスは全て確認）。この日も一日中、娘が母親に代わってアカンボウに世話行動をしていた。

以上述べたように、10月8日からの3日間、アカンボウは常に確認できたにもかかわらず、母親はほとんどの時間確認されなかった。おそらく、母親は一時的に群れのサルと接触することはあっても、多くの時間群れから少し離れたところで過ごしていたと考えられる。しかし、アカンボウはまだ生後5-6ヶ月であり、栄養面（授乳）を含めて日常生活の中で母親に依存する度合いが高かったはずだから、たとえ観察者が探索して確認できなくても、すなわち“群れの内”にはいなくても、母親が必要とあらばアカンボウと接触できるほどには近くにいた（群れ本来の広がりの中にはいた）可能性が高い。

b) 事例2. 11月7日から8日の観察

11月7日に群れを追尾中の12時36分、群れから100~200m離れた場所でC-1音声やB-1音声（伊谷, 1965）を含む声がしばらく続き、騒がしくなった。おそらく群れ外オスがメスを攻撃し、メスが悲鳴を上げていると推察されたが、その日に確認できていたメスはそのとき全て筆者の視界内にいた。筆者の周囲にいたメスは、中心オス4頭のうちの第三位オス「ラキ」のすぐ近くに集まり、しばらく騒ぎが起こっている方向を見ていたが、再び騒ぎが大きくなった12時48分、全個体が一斉に騒ぎのする方へ走り出した。なお、この日第一位オス「タイヨー」と第二位オス「イツモ」は確認されていない（詳細は山口, 2020を参照）。その後アカンボウの悲鳴が聞こ



写真1. 11月7日に発見されたときのアカンボウの様子

え、「ラキ」が悲鳴の聞こえた方向に単独で走っていった。メスたちは取り残され、多くが樹上に登って群れ外オスから避難した。12時50分、筆者がその状況を確認しに行ったところ、アカンボウが娘の背中にしがみついているのを発見。アカンボウは顔面に怪我を負っていて、鼻から出血し右目も半分ふさがっていた（写真1）。周囲を探索するも母親の姿はどこにもなかった。13時1分、「ラキ」が戻って群れは次第に落ち着いた。その日は結局最後まで母親の姿は確認できず、泊まり場まで娘がアカンボウを世話していた。

この日、筆者が発見する前にアカンボウが単独でいたとは考えにくいため、群れが駆けつける直前までは母親も一緒にいた可能性が高い。アカンボウを発見するまでにC-1音声やB-1音声が繰り返し聞かれたこと、アカンボウが怪我を負っていたことから、母親とアカンボウは群れ外オスから激しい攻撃を受け、逃げる際にはぐれてしまったと考えられる。

翌11月8日は一日中、娘は確認できたが、母親とアカンボウは確認できなかった。アカンボウが死亡してしまった可能性もあるが、そこまで致命的な怪我を負っているようには見えなかったため、その可能性は低いと思われる。また、母親の妹もこの日から確認できなくなったため、妹がアカンボウを連れ出していった可能性も考えられるが、この日まで妹のアカンボウに対する世話行動はまったく観察されていないから、その可能性もごく低い。おそらく、日暮れから白白明けまでに母親がアカンボウを回収し、妹と共に移動したのだろう。

以上のことから、母親は11月7日に一度も観察されなかった（“群れの内”にはいなかった）ものの、少なくとも最初に騒がしくなった12時36分以降は群れの近く（群れ本来の広がりの中）にいて、群れのメンバーとも接触していた可能性が高い。

なお、筆者は11月9日で調査を終了したので、残念ながらその後の母親とアカンボウについて調査できていない。筆者の調査後、11月21日～23日の金華山のサル・センサス（一斉調査）時には、両者は群れの内では確認されなかった。一方、風張喜子氏が1月23日～25日に行った調査では母親のみ確認された（私信）。さらに筆者が行った3月12日～22日の調査でも同様に、母親は確認されたが、アカンボウはいなかった。以上のことから、アカンボウは11月9日から1月21日の間に死亡した可能性が高い。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、宮城のサル調査会の伊沢紘生先生には終始熱心なご指導をいただきました。また、11月の一斉調査時および1月23日～25日の個体の確認状況については、北海道大学の風張喜子氏から情報の提供をいただきました。心より御礼申し上げます。金華山B<sub>1</sub>群の血縁関係や個体情報は、風張喜子氏をはじめこれまでB<sub>1</sub>群を調査されてきた研究者の方々の継続的な観察によるものです。これまでB<sub>1</sub>群の調査に携わった全ての方々に心からの感謝を申し上げます。最後に、調査小屋滞在中にご一緒させていただいた多くの方々には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 伊谷純一郎（1965）野生ニホンザルの音声伝達『サル・社会学的研究』川村・伊谷編. 中央公論社, p. 293-360
- 清家多慧・疋田研一郎（2019）ニホンザル・メスも群れを“離脱”するか 「宮城県のニホンザル」 vol.32, p.7-17
- 山口飛翔（2020）金華山の野生ニホンザル・交尾期における第一位オスの特異な行動 「宮城県のニホンザル」 vol.33, p. 1-25